岡田恒雄先生のご定年に寄せて

― ご研究と公開講座と ―

山　本　陽　子

岡田先生はいつも、書類鞄を下げて足早に出勤される。鞄は何が入っているのかと思うほど、いっぱいに膨れ上がっている。いっぱいなのは鞄だけではない、研究室もいっぱいである。天井近くまで積みあげられた研究書やら、ご専門の芝居や映画の大量のビデオやら資料やらに囲まれて、南向きの部屋が迷路のように薄暗くなっていて、谷間のようになった机の書類の隙間で仕事をされている。演劇に関することともなれば、どんなことでも情報収集にご熱心なのだなあと、感心を通り越して呆れてしまう。

岡田先生のご専門はドイツ演劇、早稲田大学のドイツ文学専修を出て大学院に進まれている。ご研究の対象はJ.M.R.レンツ、18世紀ドイツの本人自身もドラマティックな生涯を送った劇作家で、その作品について精力的に論文を出されている。さらにレンツを題材とする小説を書いたゲオルク・ビューヒナーや、レンツの演劇の改作を行ったベルトルト・ブレヒトにも分野は広がり、その著書の翻訳にも加わられている。

特記したいのは、近年の岡田先生がドイツ演劇にとどまらず、日本の古典演劇との比較を精力的に行われていることである。新たに歌舞伎を学び、能を知るためには世阿弥学会にも入り、机上で戯曲を読むだけではなく、こまめに劇場へ足を運ばれているのだ。かつて『東海道四谷怪談』のお岩の提灯抜けの絵を調べていますと話したら、間髪を入れず「仏壇返しの仕組みを解説したビデオがありますよ、ご覧になりますか」といわれて、驚愕したことがあった。あの鞄からは、最新の小劇場の公演のチラシをお出し頂いたこともある。

そんな岡田先生から我々が受けた恩恵の一つが、シェイクスピアホールを使った公開講座である。明星大学には全国でも珍しい、シェイクスピアのグローブ座を模した劇場、シェイクスピアホールがある。緞帳がなく、前方に張り出した舞台を持つこのホールを活かして、岡田先生は毎年、様々な企画を行ってこられた。国際コミュニケーション学科の住本規子先生が恒例で毎夏、シェイクスピアの英語劇を呼ばれているのに対し、こちらは多様な形のシェイクスピアにかかわる実演に、対談や鼎談や解説が伴うものである。

2000年の【能楽講座】は、上田邦義 による「英語能・ハムレット」と津村禮次郎と野村萬斎らによる「能・オセロー」、岡田先生のご人脈を活かした講演と鼎談付きの豪華なプログラムである。2005年春の【歌舞伎とシェイクスピア】講座では、歌舞伎の若手俳優による『曽根崎心中』の抜粋上演も、同年秋の【シェイクスピアとオペラと歌舞伎】では、鼎談「『マクベス』～シェイクスピアからヴェルディへ」とともに、オペラ歌手によるヴェルディの『マクベス』ハイライトシーンの上演も行われている。上演されただけでは学生に

なじみの薄い東西の古典作も、丁寧な解説によってぐっと身近に引き寄せられるのである。

これらの集大成ともいうべきものが、2014年、明星大学創立50周年記念としての一連の企画である。7月に岡田先生がコーディネーターとして【シェイクスピアの「ハムレット」の謎】のパネルディスカッション、9月に劇団俳小による【どさ回りのハムレット】が上演された。18世紀初頭、シェイクスピアの名が知られる以前に、ドイツでどさ回りの劇団が上演していたという異色の「作者不詳のハムレット」である。10月の公演会【シェイクスピアと歌舞伎－マクベスをめぐって－】では、『マクベス』の一部を日本舞踊として創作した「魔女たちの森」と、日本舞踊とコンテンポラリー演劇の融合した『マクベス』が上演され、岡田先生が日本の伝統芸能と西洋演劇の観点から比較し、シェイクスピアの『マクベス』を日本文化の土壌に移すとどのような劇や映画になるかを解説された。シェイクスピアのファーストフォリオを所有し、シェイクスピアホールを持つ明星大学の者にとって、この大劇作家の作品に多様な角度から活きた形で触れられる、貴重な機会であった。

また岡田先生はシェイクスピア関連以外にも、1999年には歌舞伎、2003年には糸あやつり人形劇の結城座を呼んでの解説や実演も行っている。近年では毎年【日本の音　日本の踊り】と題する公開講座を企画されている。2015年には義太夫節の生演奏による「二人三番叟」、2016年には「女流邦楽演奏家と日本舞踊家の世界」として和太鼓演奏と女流義太夫と日本舞踊、2017年は「江戸浄瑠璃　清元節」のワークショップ、2018年には「江戸糸あやつりと歌舞伎音楽」として糸あやつりの三番叟と人形劇と、お囃子演奏と小鼓のワークショップであった。このシリーズも学生たちが参加し、直に楽器に触れたりできる体験型の講座として、着実に来場者を増やしてきた企画である。

このように、岡田先生がシェイクスピアホールを通じて提供されてきた、演劇をめぐる数々の多様な体験企画を、学生のみならず我々も享受できたことは感謝の念に堪えない。けれども我々は、この貴重なホールとその的確な活用法を、どのように受継いで今後に生かしてゆけばよいのか、ちょっと重い宿題を頂いてしまっているのでもある。